

O.F.ボルノーと若松英輔における 「リルケの死生論」の教育学的一考察

An Educational Consideration on “Rilke’s View of Life and Death”

by O.F.Bollnow and Eisuke Wakamatsu

広岡義之

要 旨

本稿では、「リルケの死生論」について、教育（哲）学的に考察することを目的とする。その際、筆者は、ドイツを代表する教育哲学者ボルノーの実存的なリルケ論を展開した後に、日本の新進気鋭の大学研究者で卓越した批評家、若松英輔のリルケ論を紹介する。両者を比較することによって、リルケの詩および思想が、近代という時代にどれほど必要不可欠な人間把握であるかを浮き彫りにすることを試みる。ボルノーと若松英輔という時間的にも空間的にもまったく接点のない二人に共通する人間理解は、「死に関する実存的アプローチ」であり、日本の教育学あるいは教育哲学がこれから深めて研究していかなければならない分野であると筆者は確信している。

キーワード：ボルノー リルケ 若松英輔 死 池田晶子 不登校 実在 実存哲学 死者への畏敬 生命尊重

はじめに

本稿では、「リルケの死生論」について、教育哲学的に考察することを目的とする。その際、筆者は、ドイツの教育哲学者ボルノーの実存的なリルケ論を展開した後に、日本の稀有な批評家、若松英輔のリルケ論を紹介する。両者を比較することによって、リルケの詩および思想が、近代という時代にどれほど必要不可欠な人間把握であるかを浮き彫りにすることを試みる。具体的には主として、ここ数十年の間に日本が経験した未曾有の大震災後に、「死者論」という観点から、私たちはどのように人間の真の「死」の問題を取り扱ってきたかを省察することにする。若松英輔がどのように人間の「死」の問題を、「我が事」として受け止めていることを浮き彫りにして論じてみたい。

ボルノーと若松英輔という時間的にも空間的にもまったく接点のない二人に共通する人間理解

は、「死に関する実存的アプローチ」であり、日本の教育学あるいは教育哲学がこれから深めて研究していかなければならない分野であると筆者は確信している。

第1章 ボルノーが理解する「リルケにおける死」

第1節 「生における死」

●初期リルケにとって、生は死と同じ次元に存在する

ボルノーに従えば、リルケが手がけた文学作品にはすべて、「死」の問題が通奏低音のように流れているという。初期の作品では『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』の中でそれが特徴的に現われており、生と死が生陶酔の頂点で一つとなっており、ボルノーは次のように描写している。

「この作品では、生は、まさにその頂点においては死と同質である。愛と死は融合し、生きることの最高は同時に死ぬことなのである。」(1)

ここでリルケにとって生は死と同じ次元に存在し、愛することと死ぬことは溶け合い、生きることが死ぬことと同質になると、考えている。ここにリルケの人生観が如実に浮き彫りにされているとボルノーは実存哲学的観点から鋭く指摘している。

●「死」の様相がますます強くなっていくリルケの作品

リルケにおける「死」の問題はさらに発展していき、後には本質的な転向が生じることになる。それは、すでに現在のものである「生における死」との対決が深まる転向であり、『時禱集^{じとうしゅう}』から『マルテ・ラウリッツ・ブリッグの手記』に至る過程の中で見出すことができると考えられる。こうしたリルケの諸作品には、ある陶酔的な親近感がじょじょに姿を消していき、「死」の様相がますます強くなっていく。そして、やがてリルケの作品には、生を後退させ、恐ろしい異様なものとして「死」が描かれるようになるとボルノーは明確に報告している。たとえば、『白衣の貴婦人』で、使者がペストについて次のように報告している。

「そこでは死が、
わが家にでもいるように、はいったりでたりしています、
それはわたくしたちの死ではなく、見知らない死なのです・・・
神から給料をもらっている死ではなく・・・
誰も知らない、見知らない死なのです。」(2)

この時期のリルケは、自分の死と見知らぬ死を明確に区別していることを、私たちには容易に

理解できるだろう。見知らぬ死は、偶然のものとして外部から生に侵入してくる。それに対して、自分の死は「神から給料をもらっている」生の、内面の必然性に由来する死なのである。ここから発展して、生と死の対立をより高いところで統一しようとするロマン主義的な生と死の神秘に、私たちは触れることができる。『ドゥイノの悲歌』におけるリルケ後期の言葉をボルノーは次のように引用する。(3)

「生者たちはみな
過ちを犯している、あまりにも区別しすぎる過ちを。
天使たちはしばしば区別を知らぬ（という）
生者たちのあいだを歩んでいるのか、それとも死者たちのあいだを歩んでいるのか。」(4)

●死は、体験されない出来事ではなく、この現在を構成する要素そのものとなる

リルケのここでの課題は、此岸の生を、彼岸の生と完全に融合させて一つに統一することにある。これとの関連で、さらにボルノーは『白衣の貴夫人』を引用する。

「ごらんなさい、このように死は生のなかにあるのです。
生と死、それは絨毯を織りなす糸のように、
編みあわされているのです・・・
誰かが死ぬとき、いいえ、そのみが死ではありません。
死は誰も死ぬことのできないときにあるのです。
死は容易ならぬもの。死を葬ることなどできません。
誕生と死去とはわたくしたちの内部に日々あるのです。」(5)

ここでボルノーは、リルケの「死は生のなかに」あるという点に鋭く注目している。初期のリルケには存在しなかった本質的な前進がここに見られるという。すなわち、死は、もはや体験されない出来事ではなく、この現在を構成する要素そのものとして、リルケによって考えられるようになったからである。ボルノーはそれを次のように解釈している。

「比喩的な広い意味で死と呼ぶこともできるものが絶えず生のあらゆる箇所で起こり、したがって生は絶えざる死滅と再生のうちに存続し、こうしてやがて生と死とは絨毯を織りなす糸のように編みあわされてゆく、という意味なのである。」(6)

第2節 「大きな」死が「小さな」死になること

●工業的大量生産的な生と死に対する人間の問題を鋭く指摘したリルケ

上述のロマン主義的な生の哲学的解釈と並んで、ボルノーは「見知らぬ死」と「自分の死」の区別から、リルケ特有の死生観を次のように展開していく。「小さな」死は、思いがけなく人間を襲う死で、大衆的現存在にみられる死のことである。ボルノーはリルケの『時禱集(じとうしゅう)』の中で、「そこには、……小さな死が、誰もそこで捉える小さな死がある」を引用して、悲惨な大都会、病院での大量生産の死の人間疎外的な問題を取り扱っている。人々は自分の病気に付属した死を死んでいるほかないとその問題点を指摘したうえで、ボルノーはこうした死の在り方を次のように指摘する。

「内面的に営まれた特別の生が特色のない大衆的現存在である『ひと』において均等化されてしまっていること、(中略)死でさえもはや本来的な自己存在(Selbstsein)へと呼びさます警告者として現われることはなく、皮相に受け継がれたままの形をとって現われる結末になってしまう。」(7)

●「個々の人間の特別な生から生じた一つの死を与えよ」(リルケ)

ボルノーはこのように述べて、リルケがどうして、工業的大量生産的な生と死に対する人間の問題を鋭く指摘したかの理由を展開している。

リルケは『時禱集』の別の箇所、生と死について次のような叫びをあげている。

「おお、主よ、すべてのものに自己自身の死を与えたまえ」(8)

ボルノーの解釈によれば、この詩の一節は、「個々の人間の特別な生から生じた一つの死を与えよ」というリルケの訴えであるという。ここからのみ、人間が自己自身の死に対してもつ課題の意識が芽生えだす。その課題とは、自己自身の死を、自己に固有の仕事として完成させ、自己の死を「仕上げる」という課題である。こうして「大きな死」の獲得のために努力することによって、はじめて人間は非本来性から本来性へと高まっていくとボルノーは暫定的な結論を示している。(9)

第2章 若松英輔におけるリルケ理解

次に私たちはボルノーとは時代と空間がまったくちがう気鋭の大学研究者で卓越した批評家の若松英輔の論を展開する。しかし両者ともに、人間の真の「死」についてきわめて共通する本質的な議論をしているので、それをここで紹介してみたい。

第1節 リルケの『ドゥイノの悲歌』と『若き詩人への手紙』解釈

「声がする、声が。聴け、わが心よ、かつてただ聖者たちだけが

聴いたような聴きかたで。巨大な叫び声が

聖者らを地からもたげた。……

……おまえも神の召す声に

堪えられようというのではない、いやけっして。しかし、風に似て吹きわたりくる声を

聴け、静寂からつくられる絶ゆることのないおの音信（おとずれ）を。」(10)

●「聖者ではない私たちはせめて死者の声を聴こう」（リルケ）

若松は、リルケの代表作である『ドゥイノの悲歌』（手塚富雄訳）の上の一節を援用した後に次のように述べている。大地からの轟を詩人リルケは「声」という呼びかけとして受け取る。しかしほとんどの人間は、そのうねりのような大地の「声」、「神の召す声」に堪えられない。(11)

この詩には次の一節が続くと若松は言う。「あれこそあの若い死者たちから来るおまえへの呼びかけだ」（リルケ）。静寂の中に生み出される絶えることのない「音信（おとずれ）」とは、死者の声に他ならない、と若松英輔は明快に指摘して、続けて彼は言う。

「神の言葉を聴くのは難しい。それを聴くのは聖者の使命であるならば、聖者ではない私たちはせめて死者の声を聴こうと、リルケは言う。」(12)

若松英輔によれば、「ドゥイノ」は、ある時期、リルケが暮らしていた場所の地名であるという。『マルテの手記』執筆後に休息をとっていた最中に、突如として、詩作の発想が沸き起こった。リルケが暮らしていたドゥイノの古城は、海の見える高台にあり、60メートルほどの崖に立ったときに、激しい風が吹き、波がさざめき、自然のざわめきの中に一つの声を聴いたというのである。

「ああ、いかにわたしが叫んだとて、いかなる天使が
はるかの高みからそれを聞こうぞ？」

続けてリルケは手帳に書き留める。

「よし天使の序列につらなるひとりが／不意にわたしを抱きしめることがあろうとも、わたしはその／より烈しい存在に焼かれてほろびるであろう」。

リルケが岸壁に立ったとき、意思を持たない天使がリルケを訪れたという。天使との邂逅もまた慄きの経験だったと若松は明快に指摘している。(13)

完成までに十年もかかった『ドゥイノの悲歌』は、リルケが自ら書こうとしたものでなく、言葉がリルケに訪れるまでじっと待ち続けたのである。彼にとって詩作とは、想念を語る言葉を探すことではなく、言葉の到来をひたすら待つことであった。こう述べた後、若松は次のように指摘する。

「実感から言えば彼は、詩の作者であるより記録者であった。彼の秘密は、書くことよりも沈黙にあった。」(14)

●詩作とは真の語り手からの「委託」を受けること

『ドゥイノの悲歌』の中で、リルケは、詩作とは真の語り手からの「委託」を受けることだと考えた。若松によれば、悲歌は単に悲しみを謳ったものではなく、むしろ悲しみの彼方にあるもの、あるいは彼方の悲しみを謳うものなのである。(15)

「そうだ、年々の春はおまえをたのしみにしていたのではないか。あまたの星はおまえにかんじとられることを求めたのだ。
過去の日の大浪（おおなみ）がおまえに寄せてきたではないか。または、
開かれた窓のほとりをすぎたとき、
提琴の音がおまえに身をゆだねてきたではないか。それらすべては委託だったのだ。」

ここから理解できることは、リルケにとって詩とは、この世界を謳いあげる言葉の芸術というよりも、「彼方の世界から訪れる呼びかけ」であった。さらに若松は続ける。

「彼に言葉を『委託』したのはときに天使であり、ときに死者だった。(改行) 詩で謳われていることだけが重要なのではない。詩が生まれていること自体が深甚な意味を有するのである。超越が存在することに比べれば、それが何を語ったかは二次的な問題にすぎない。」(筆者傍点)(16)

●「自らの内へおはいりなさい。あなたが書かずにいられない根拠を深くさぐってください。」 (リルケ)

あるとき、リルケがまったく知らない詩を書く青年から、リルケのもとに手紙が届いた。リルケは丁寧な返信をその青年に書き送った。これはリルケの特徴を示す言葉として非常に有名な箇所となっており、様々な研究者や文学者によって引用されている。

「あなたは外へ眼を向けていらっしゃる。だが何よりも今、あなたのなさってはいけないことがそれなのです。誰もあなたに助言したり手助けしたりすることはできません。誰

も。ただ一つの手段があるきりです。自らの内へおはいりなさい。あなたが書かずにいられない根拠を深くさぐってください。(中略) もしもあなたが書くことを止められたら、しななければならないかどうか、自分自身に告白して下さい」(『若き詩人への手紙』 高安国世訳)。(17)

第2節 志村ふくみと池田晶子の死者論

(1)『薔薇のことぶれ：リルケ書簡』の著者、志村ふくみについて

若松英輔は、染織作家の志村ふくみ著、『薔薇のことぶれ：リルケ書簡』(人文書院)を取り上げて以下のようにリルケを論じている。同書は、三か月前に、『晩祷—リルケを読む』が刊行されているが、その読編である。(18)

●震災以後の日本において、志村ふくみ以外に、リルケを語ろうとした人は皆無に近かった

若松英輔によれば、小説『マルテの手記』や、詩『ドゥイノの悲歌』で知られる19世紀プラハに生まれた文学者のリルケは、言葉に深い力があり、作者が刻んだ文字は、私たち読者に深く沁み込むという。「言葉があたかも触手となって傷ついた心を癒そうとする」実感を持ちうると若松は言う。天使を描き、死者を語った、言葉が心に深く沁み込むリルケの作品を読むことで、私たち読者は、「自分でも忘れていた心に秘められた場所を思いだす。その意識の奥の部屋には、私たちの生涯すべての歴史が生きていて、その場所で人は真実の自己やすでに彼岸へと逝った人々にまみえることができる。」(19)

こう述べた後で続けて若松は言う。震災以後の日本において、リルケは読み返されるべきであるのに、志村ふくみ以外に、リルケを語ろうとした人は皆無に近かったと明快に指摘したうえで、次のように続ける。

「『芸術とは人をなぐさめ、よろこばせることは言うまでもないが、実は人を蘇生させる程の力をもっている』と作者〔筆者註：志村ふくみ〕は書いている。(改行) 文学の言葉を、文学者からのみ聞く時代は、すでに終わった。だが、文学は生きている。むしろ、文学者とは単なる職業名ではなく、真に文学の伝統に用いられた者に付される呼び名であることを、また、誰の心にも詩人の魂があることをこの本は教えてくれている。」(20)

このような若松の指摘に対して、筆者は教育哲学者として、これまで本当に、傷つき弱りはてた大人たち(教師達)に向かって、あるいは子どもたちに向かって、蘇生させる言葉を語ってきたのかと、率直に深く反省させられた。

(2) 意中の人―池田晶子のこと―

若松英輔は2012年3月に『魂にふれる―大震災と、生きている死者』を刊行した。本書で論じられているのは、死者論であるが、ここでの「死者」とは「遺体」の異名ではないと若松は明言している。(21)

●震災後、被災した人々や遺族の「痛み」を真剣に考える報道に出会えなかった

若松は、震災後、被災した人々や遺族の「痛み」がどこにあるのかを真剣に考える報道になかなか出会えなかったと述懐した後、次のように自らの著作者としての使命を述べている。

「(前略) そしてもっとも言語化しづらく、しかし、彼らの心の奥にあったのは、世間が『死者』への畏敬を忘れたこと、さらにいえば『死者』としての存在を黙殺したことへの嘆きではなかったか。」(22)

こう述べた後、震災後、多くの文学者や哲学者たち、そして組織としての宗教も、「死」を語りはしたが、少数の例外を除いて「死者」を語ったものが、ほとんどいなかったと鋭く批判した。そうしたある日、若松が電車に乗っていたときに、哲学者である池田晶子の次の文章と出会ったというのである。

「死者
死体の謂ではない
生存ではない存在形式において存在する者
つまり異界の者
の思い為すこと、それが物語である

死者の思い為しを生者は生きている
死者に思われて生者は生きている
したがって、生存とはそのような物語である」『リマーク 1997-2007』(池田晶子)

●池田晶子の文章に出会って以来、若松英輔にとって「死者」は論じる対象ではなくて、不可視な隣人になった

若松英輔はこの池田晶子の文章を引用した後、この時以来、若松にとって「死者」は論じる対象ではなくて、不可視な隣人になったと告白している。それと同時に、震災後の日本は、「死者」の問題を正面から捉えることなく、真実の一步を踏み出し得ていないと確信したという。(23)

家に着いた若松は、『リマーク 1997-2007』(池田晶子著)を出版した会社社長にすぐにメー

ルを送り、「死者」は実在する、「死」とは生命の終わりではなく、新生であるというということを、言葉にしてみたいと綴ったという。書き始めて二か月で、2012年3月に『魂にふれる―大震災と、生きている死者』は完成した。苛酷ではあるが緊密な60日間であったが、「何者かに用いられた仕事だったという実感は、今もある。」とまとめている。(24)

(3) 若松英輔の『若き詩人への手紙』解釈

若松英輔はリルケについて以下のように考えている。リルケに詩を送りつけた若い青年に語ったことばであり、多くのリルケ研究者がこの点に言及する有名なことばである。

「あなたは外へ眼を向けていらっしゃる、だが何より今、あなたのなさってはいけないことがそれなのです。誰もあなたに助言したり手助けしたりすることはできません。誰も。ただ一つの手段があるきりです。自らの内へおはいりなさい。あなたが書かずにいられない根拠を深くさぐって下さい。(中略) もしあなたが書くことを止められたら、死ななければならないかどうか、自分自身に告白して下さい」(『若き詩人への手紙』 高安国世訳)

若松にしたがえば、外に眼をむけると人は行動する。しかし詩を書こうと思うなら、内へ入るとリルケは言う。ここでの「内」とは現代人が考える内面ではないし、さりとて深層心理学のいう無意識でもない。むしろ「内」とは、現象と実在、肉体と魂の關係に近いものであるという。様々な現象の奥に「実在」と呼ぶべき存在を感じる。魂は内なるものであるが、肉体を包んでもいる。それゆえ私たちは、肉体的な衝撃以外でも、暴力的な言動に触れるとき、身を傷つけられるのである。若松はさらに言う。(25)

「この構造は、私たちが暮らす世界空間にも当てはまる。世界の奥に『内なる世界』があるのではなく、『内なる世界』がこの現象界を包む。」(26)

私たちは、日常の価値観として、「内なる世界がじつはこの現象界を包む」とは容易に理解しにくい、本質的にはそうだろうと直観しうる。だからこそ、こうした価値観の転換を意識した教育をすることに意味が見出せるのではないだろうか。もちろん、確固とした本質の外面的な現われである「現象界」は、私たちに強固なものとして立ちはだかり、吹けば飛んでいくような繊細な内なる世界が、「現象界」を包み込むように思えないが、若松英輔もボルノーもそうした先入観を突破しようという思想を私たちに提供しようとしているのであろう。

第3章 若松英輔の死者論から、教育学が学べること

第1節 死者について語るのではなく、死者と生きることの重要性

●死者について語るのではなく、死者と生きることが大切だ

若松英輔は、本書を震災や様々な悲しみに打ちひしがれている読者に、「君は」と呼びかけるかたちで本書を書き上げている。そしてその「君」は、愛について語る人となるよりは、愛を生きる人になるほうが素晴らしいと提案している。死者との関係も同様に、死者について語るのではなく、死者と生きることが大切だと指摘してみせる。こうした視点こそ、教育学で「生命尊重」を考察する場合に極めて重要な大前提となると筆者には思われる。安全教育や生命尊重の教育を語り実践する場合、特に小学校高学年から高校生にかけては、若松のいう「死者について語るのではなく、死者と生きること」を学ぶ視点をけっして忘れてはいけないだろう。特に筆者の研究対象とする道徳教育等では、「死者と生きること」について、秀逸な読み物教材を使用すれば、たとえ小学校の子どもたちであっても、深く主体的な対話を展開して、この主題に迫っていくことも可能であると思われる。本稿では紙幅の関係でこれ以上、論じられないが、このテーマは別の機会に改めて考察してみたい。

●君が見たこと、感じていることは、君が生きることによって真実になる

震災についても「君が見たこと、感じていることは、君が生きることによって真実になる。その生を他者と分かち合うこと、それがぼくらに委ねられた責務だ。それを語るとき、君と死者との関係がそうであるように、永遠の次元の出来事としても語ってほしい。」(27)

このように述べたあと、若松は、19世紀のオーストリアに生まれた詩人で小説家のライナー・マリア・リルケの晩年の作品『オルフォイスへのソネット』の次の詩を紹介するのである。

「記念の石は建てるな。ただ年毎に
薔薇を彼のために咲かせるがよい。」 (田口義弘訳) (28)

若松はこの詩を次のように解釈する。記念碑を建てる、人はそこに刻まれた言葉を忘れてしまう。しかし花を植える者は、起こったことを決して忘れない。なぜなら花が私たちに、その出来事を語りかけてくるからだという。ここで花とは死者の魂であり、私たちは「花」と対話すると確信する。(29)

若松英輔はもう一つのリルケの手紙の一節を紹介する。

「死者は自分の始めていたさまざまなことを、自分のあとに残った人々に、もしこの人々がいくらかでも内面的に結ばれ合っていたとしたら、続けてやりとげしてくれる課題

としてゆだねるのではないのでしょうか。」(「エリザベート・シェンク男爵夫人への手紙」
高安国世訳) (30)

●死者は、「課題」の中で、私たちと生きる、ひそやかな同伴者となる

このリルケの手紙を若松は引用して、次のようにリルケを解釈しつつ、文章を結んでいる。私たちの課題は生きることであり、他者と悲愛によって結ばれることだという。それには困難が伴うがそのときは祈ればよいと若松は主張する。祈りは願うことでなく、沈黙の言葉を聴くことである。死者は、「課題」の中で、私たちと生きる、ひそやかな同伴者となる、というのである。「死者と生きる」とは、死者の思い出に閉じこもることではなく、今を生きることであり、新しい歴史を刻むことだと、若松は、魂からの言葉を発している。(31)

第2節 真に幸福と呼べるものは「内部世界」にしかない

●「想像の秘儀」を潜り抜けることによって、人は初めて真実の世界を生きることができる

若松英輔によれば、「想像の秘儀」という営為を潜り抜けることによって、人は初めて真実の世界を生きることができると指摘している。それとの関連で、「想像の復権」を強く唱えたのは、詩人のリルケだったと若松は指摘し、次のように述べている。(32)

「リルケにとって実在と『内部』はほとんど同義であり、詩を書くとは、『内部』に生きている死者と天使から委託を受けることだった。リルケ—特に後期のリルケにおいて想像力とは、内部世界を構築する営みと同義であり、その『内部』には、天使だけでなく死者も暮らしていた。」(33)

晩年の作品『ドゥイノの悲歌』には、上述した不可視な他者からの言葉が満ちているという。若松英輔はリルケの以下の詩を紹介して、「内部」の重要性を指摘している。

われわれは隣人たちに承認された幸福を高くかけようとする。疑いようのない幸福がわれわれに顕現するのは、ただわれわれがそれをわれわれの内部において変化さすときだけなのに。

愛する人たちよ、どこにも世界は存在すまい、内部に存在するほかは。(手塚富雄訳) (34)

●真に生きようとすれば、人は「内部」とのつながりを回復しなければならない

真に幸福と呼べるのは「内部世界」にしかないのに、人はどうしてそれを外の基準ではかろうとするのかと、リルケは鋭く私達の時代を批判する。真に生きようとすれば、人は「内部」との

つながりを回復しなければならないという。(35)

●「支持的存在への通路としての庇護性：ある不登校児を例に」

この視点を教育の問題に引き付けて考えてみるとどのような具体例が示されるだろうか。筆者はかつてある不登校の子どもの例を、ボルノーの庇護性との関連で次のように報告したことがある。上述した若松の「リルケにとって実在と『内部』はほとんど同義」であることと深くつながる主題ゆえに、以下に要約してみよう。

「支持的存在への通路としての庇護性：ある不登校児を例に」と題した筆者の言説を要約するとおおよそ、次のように言い得よう。ボルノーが主張する「庇護性」の特徴は、人間の実存的動揺を超越して、自己自身のうちに、新しい確固としたよりどころを築くための人間の内的状態を指し示す。ボルノーにとって庇護性とは、人間を超えた外にあって人間を支え保護している存在のことである。そこでは人間にとって、以下のような形而上学的な問題が示唆される。ボルノーの言説を引用してみよう。

「不安と絶望にかられて、いっさいの支持的なく生の関連>から引き離された、そしてどたん場の孤独に投げ返された人間が、どのような仕方でも、再びかれを取りまく世界にたいする新たな信頼に達することができるか、が問題になる。」(36)

こうした存在論的連関の中でのみ、私たちは人間の「新しい庇護性」について有意義に論じることが可能となる。さて、ボルノーは実存哲学の負の側面として、重苦しい圧迫的な気分を指摘したうえで、そうした「気分」は人間を世界から締め出し、自己自身のうちに閉じ込めてしまう、そしてその結果、人間を孤独へ陥れると考えている。その逆に、人間が外界に対して開かれており、この外界が人間にとって近づきうるように感じたとき、人間は自ら幸福な精神状態にあるという。(37)

●「不安と絶望にかられて、いっさいの支持的なく生の関連>から引き離された」人間（ボルノー）＝不登校の児童生徒たちそのもの

こうしたボルノーの指摘については、これまで観念的・抽象的にしか筆者は考えてこなかったけれども、「私たち人間」を、様々な事情で学校に、あるいは自分の学級に足を運ぶことのできない多くの「不登校児童生徒たち」と置き換えることができるのではないかと考えるようになった。「不安と絶望にかられて、いっさいの支持的なく生の関連>から引き離された」人間とは、紛れもなく、不登校の児童生徒たちそのものであり、保健室登校を余儀なくされる子どもたちと読み替えることができるだろう。

●不登校児童が学校に、クラスに戻れるときとは？

その逆に、人間が外界に対して開かれており、この外界が人間にとって近づきうるように感じるとき、人間は自ら幸福な精神状態にあるとボルノーは考える。「こころ」の壁を感じて、所属する学級の戸口の前までは来ることができるのに、そこから先は足が竦み、クラスの中に入ることができなかった子どもが、実際のビデオ映像で取り上げられているのを筆者はある機会に見ることができた。その後、様々な先生方や友達の援助や協力を経て、ついに自分の所属するクラスに入ることができるようになった同じ不登校児童の姿のビデオ画像を目の当たりにしたとき、その子どもの内面に、明らかな変化が生じていたことを、筆者は明確に感じ得た。すなわち、その子どもが「外界」という所属学級に対して開かれるようになり、この外界〔所属する学級〕が、その不登校児童にとって「親しみのある近づきうる空間」に変貌しており、そのように感じ始めることができたからこそ、その児童は自ら「幸福な精神状態」になりえて、そのときに初めて、自分のクラスに足を踏み入れることができたのである。(38)

いじめで保健室にしか通えなかった子どもが、様々な愛情を受けて、教室に戻れるこうした事例を示してきたのは、「内なる世界がじつはこの現象界を包む」ことの傍証としたかったからである。

●人間を世界から自己自身のうちに閉じ込めてしまう側面と、人間を支え保護している側面

ボルノーは、こうした二つの側面—人間を世界から締め出し自己自身のうちに閉じ込めてしまう側面と、人間を支え保護している側面—について、次のように鋭く対極的に記している。

「人間は、一つの可能性では、自己自身のなかに閉じこもり、外界とのいっさいの接触を絶つ。これに反して、他の面は、人間を解放し、人間になんらかの真の人間外の現実との接触をはじめて可能にする。それゆえ、人間の外にある支持的な実在性の問題は、幸福な気分状態の基底と、なんらかの仕方で連関しており、この状態の分析は、したがって、もっとも高い存在論的意義をもっている。」(39)

●人間の外部にある支持的な実在性についての存在論的な考察

ボルノーはここで詩人のリルケを登場させる。なぜならリルケは、他のだれよりも実存主義的不安と絶望とを切り抜けてきて、それを真実な詩のかたちで結晶させた人だからである。リルケはその長い人生航路の果てに次のように謳った。

「神を見出すためには、人は幸福でなければならない。なぜなら、自分の困窮から神を勝手に創り出すような人は、気忙しく先を急ぐからである。・・・」(リルケ「フランス語による詩集」)(40)

ボルノーはこうしたリルケのことばを引用することで、人間の外部にある支持的な実在性についての存在論的な考察を深めようとしている。「神を見出すためには、人は幸福でなければならない」とは、自分の困窮から発する絶望的な試みは見込みのないものであるという認識である。ここで私たちに深く理解できることは、＜幸福であること＞とは、人間自身の努力によって獲得できるものではなく、「恩寵」のようなかたちで人間に授かるものであるという実在の秘儀である。(41)

●優位性は「内なる世界」にある（若松英輔）

若松英輔にあって、優位性は「内なる世界」にあり、その内なる精神世界が実は、「外なる世界」である現象界を包み込んでいるのだ、と指摘してみせる。筆者は、さきに不登校児の例で、どうしても自分の所属する教室に入れなかった子どもが、教師や友達のところからの寄り添いと精神的援助によって、ついには文字通り教室に「入れた」映像を見ることができた。この瞬間、若松がいう『『内なる世界』がこの現象界を包む』ことの真の意味を具体的に把握できた。

終わりに

●「大震災と死者の詩学」

死者とはすでになくなった過去の実在、つまり死亡者ではないと若松英輔は考えている。若松のいう死者とは、私たち生者が存在するように、実在するいわば「生ける死者」である。

「死と死者は異なる。むしろ、死者が、死から新生した者であることを考えると、死者は、死からもっとも遠い存在であるとも言える。」(42)

「死者は、死からもっとも遠い存在である」とは、若松英輔のきわめて逆説的な発想であり、筆者は意表を突かれた思いがした。その意味で、この若松の「死者論」は、極めてユニークな人間学的、教育学的課題となりうると思われる。

もし「死者」が、死からもっとも遠い実在であるならば、震災の問題は、死者を包括する議論が展開されなにかぎり、真の解決へ向かわないと、若松は近代に対して警鐘を鳴らす。死を経験したのは死者だけであるという厳粛な事実を、近代は忘れてしまったのではないかと私たちに鋭い問いを発している。「臨死」は死でなく、彼岸に接しながらも、渡らずに戻ってきた「生者」であるという理解を若松は示している。その意味で、死を経験したものはだれもいないのに、近代は、無数の「死論」を吐き出してきたと、鋭く若松は批判している。(43)

この「近代」という時代には、芸術や宗教、教育の世界においてすら、「死者」が正当に位置づけられていないとの若松の痛烈な批判は、教育哲学徒の一人として、深く一考に値する重要課題である。いじめや不登校、教育事象に関わる様々な事件で、多くの子どもたちや教師たちが、傷

つき、職場や学校を離れ、その結果、命を亡くする悲劇が繰り返されている。当人だけでなく、遺族の人々の心情を察する際に、私たち教育哲学研究者を標榜する私たちは、どう受け止め、どのように返答しうるだろうか。まさしく、本質的な教育的問いを若松英輔から投げかけられている思いがする。

註

- (1) Bollnow, O.F., *Existenzphilosophie*, 8. Aufl., Kohlhammer, 1978. S.83.
ボルノー著、塚越敏・金子正昭共訳、『実存哲学概説』、理想社、1976年、144頁。
- (2) Bollnow, a. a. O. S.83. 『実存哲学概説』145頁。
- (3) Bollnow, a. a. O. S.84. 『実存哲学概説』146頁参照。
- (4) Bollnow, a. a. O. S.84. 『実存哲学概説』146～147頁。
- (5) Bollnow, a. a. O. S.85. 『実存哲学概説』147～148頁。
- (6) Bollnow, a. a. O. S.85. 『実存哲学概説』149頁。
- (7) Bollnow, a. a. O. S.86. 『実存哲学概説』150～151頁。
- (8) Bollnow, a. a. O. S.86. 『実存哲学概説』151頁。
- (9) Vgl., Bollnow, a. a. O. S.86. 『実存哲学概説』151頁参照。
- (10) 若松英輔著、『生きる哲学』、文春新書、文藝春秋、2016年、131頁。
- (11) 若松英輔著、『生きる哲学』、131頁参照。
- (12) 若松英輔著、『生きる哲学』、131頁。
- (13) 若松英輔著、『生きる哲学』、133頁参照。
- (14) 若松英輔著、『生きる哲学』、133頁。
- (15) 若松英輔著、『生きる哲学』、134頁参照。
- (16) 若松英輔著、『生きる哲学』、135頁。
- (17) 若松英輔著、『生きる哲学』、140頁。
- (18) 若松英輔著、『涙のしずくに洗われて咲きいつるもの』、河出新社、2014年、75頁参照。以下、『涙のしずく』と略記する。
- (19) 若松英輔著、『涙のしずく』、76頁。
- (20) 若松英輔著、『涙のしずく』、76頁。
- (21) 若松英輔著、『涙のしずく』、81頁参照。
- (22) 若松英輔著、『涙のしずく』、82頁。
- (23) 若松英輔著、『涙のしずく』、83～84頁参照。
- (24) 若松英輔著、『涙のしずく』、84頁参照。
- (25) 若松英輔著、『生きる哲学』、141頁参照。
- (26) 若松英輔著、『生きる哲学』、141頁。

- (27) 若松英輔著、『魂にふれる—大震災と、生きている死者』、トランスビュー、2017年、18～19頁。以下、『魂にふれる』と略記する。
- (28) 若松英輔著、『魂にふれる』、19頁。
- (29) 若松英輔著、『魂にふれる』、19頁参照。
- (30) 若松英輔著、『魂にふれる』、19頁。
- (31) 若松英輔著、『魂にふれる』、20頁参照。
- (32) 若松英輔著、『涙のしずく』、131頁参照。
- (33) 若松英輔著、『涙のしずく』、131～132頁。
- (34) 若松英輔著、『涙のしずく』、132頁。
- (35) 若松英輔著、『涙のしずく』、132頁参照。
- (36) O.F.Bollnow, Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus, Stuttgart 1955, 4. Aufl. 1979, S.147.
ボルノー著、須田秀彦訳、『実存主義克服の問題——新しい被護性——』、未来社、1978年、167頁。
以下では、『庇護性』と略記する。なお本稿では、「被護性」を「庇護性」に変更している。
- (37) Vgl., Bollnow, a. a. O. S.148. 『庇護性』、168頁参照。
- (38) 木村泰子著、『「みんなの学校」が教えてくれたこと—学び合いと育ち合いを見届けた3290日—』、小学館、2015年。および木村泰子先生自身が作成したビデオを参照。
- (39) Bollnow, Neue Geborgenheit.S.148. 『庇護性』、169頁。
- (40) R. M. Rilke. Gedichte in französischer Sprache. Wiesbaden 1949, S.114. in: Bollnow, a. a. O. S.149. リルケ著、『フランス語による詩集』in 『庇護性』、169頁。
- (41) Vgl., Bollnow, a. a. O. S.149. 『庇護性』、170頁参照。
- (42) 若松英輔著、『涙のしずく』、142頁。
- (43) 若松英輔著、『涙のしずく』、143頁参照。